【論文】

メンタライジング能力尺度の作成

井上　亜希・上地　雄一郎

（東京都江戸川区子ども家庭支援センター）・（岡山大学）

本研究では，メンタライジング能力を簡便に測定するメンタライジング能力尺度を作成した。因子分析の結果，5因子27項目が抽出された。第5因子に負荷する項目群を除いて一応の内的整合性があることが確認された。因子ごとに不統一な結果も見られ，下位尺度ごとに得点の高低の意味が異なり，ポジティブな意味とネガティブな意味の両方をもっていると思われる下位尺度もみられた。下位尺度のα係数が第1因子を除いて.80に達しておらず，第5因子は.62であることから，項目内容を再検討し，項目数を増やすことも必要であろう。さらに，回答方法を変更することも検討課題である。一部使用した尺度において明確な関連がみられなかったこともあり，新たな尺度や他の尺度との関連から妥当性を検討することも必要であると考えられた。

Key words:メンタライジング　メンタライゼーション　質問紙尺度　愛着

問題と目的

現在，虐待や育児放棄などの問題は後を絶たない。児童虐待相談の対応件数は12万件を超え過去最多となり(厚生労働省,2017),増加の一途をたどっている。養育者との親密な愛着関係は，その後の対人関係の基盤となると考えられていることからも，不安定な愛着形成は，虐待への影響の可能性も否定できない。安定した愛着形成のために重要であるとされていることとして，近年注目されているPeter Fonagyのメンタライジング概念がある。メンタライジング(mentalizing)とは，自己および他者の行動をその背後にある心理状態（考え，感情，欲求，願望など）の観点から理解する心的行為である。また，メンタライジングが達成される過程や達成された状態やその能力のことは，メンタライゼーションという。

メンタライジングがすべての心理療法を有効にする中核要因であるとする視点から，この概念の一般心理療法への導入も行われている。欧米では，境界性パーソナリティ障害をはじめとする多様な障害や対象に対する「メンタライゼーションに基づく治療 」(Mentalization-Based Treatment：以下，MBT)が広まりつつある。菊池(2013)は,MBTと従来の精神分析との違いにおける2つの特徴として，①実証研究に基づいた理論であるということ，②行動の原因となる前意識的な心理状態の読みとりに専念し，無意識を解釈しないことを挙げている。MBTは境界性パーソナリティ障害の自我機能の問題を契機とし，主に医療現場において発展してきたプログラムである。

このように，従来の精神分析理論とは異なり，メンタライジング理論はその実証性の高さと応用可能性の高さから，さまざまな臨床現場において注目されているが，日本での実践や研究における実証的な知見はいまだ少ないといえる。

MBTと併行して，メンタライジング能力（メンタライゼーション）の査定についての研究も行われている。メンタライジング能力は，見立てや治療方針の決定において必要な情報となりうる。また，セラピストの訓練においては，セラピスト自身のメンタライジング能力を測定することも重要であろう。さらに，メンタライジング能力と他の変数との関連を検討することは，メンタライジング能力の改善を目指す心理療法や心理教育にとって有益な情報になると考えられる。

(1)面接法

現在，メンタライジング能力の測定尺度として認められているものとしては，Fonagy et al.

(1998)による「省察機能尺度」(Reflective Functioning Scale: RFS)がある。省察機能とは，操作化されたメンタライジング能力を指すためにFonagy が使用する言葉である。RFS は，成人愛着面接(AAI)を用いて省察機能を 11 段階で評価するものであるが，習得・実施・分析に時間がかかるという欠点がある。多人数の人への調査を考慮すると，より簡便な質問紙尺度が不可欠である。日本では，菊池・山田・舘岡・関・東・福田・奥野(2012)によって「メンタライゼーション査定面接」(Mentalization Assesment Interview: MAI)という測定法が開発されており，十分な内的一貫性と中程度の評定者間信頼性が得られている。しかし，研究対象者の少なさと，再検査信頼性を求める必要があること，他の尺度との関連を求める必要があるなど，信頼性と妥当性のさらなる確認が必要であることが著者自身によって指摘されている。

(2)質問紙

既存の質問紙尺度として，Fonagy et al. (2016)の「省察機能質問票」(Reflective Functioning Questionnaire: RFQ)がある。RFQ については，現在，46 項目版の原版に 8 項目が加えられた 54 項目版と，スクリーニングを目的とした 8 項目版が作成されており，54 項目版は，英語版を含めて 12 ヶ国語版が作成されている。現行の RFQ は，自己および他者の心理状態についての確信度と，心理状態に関する不確実性を評価する 2 つの尺度から構成されている。54 項目版は，「強く同意する」から「強く反対する」の 7 件法で回答を求め，心理状態が不明瞭であるという認識をもつほど RF が高くなるように得点が算出される。RFQ は親の省察機能と関連しており，SSP における子どもの愛着パターンを予測するものであった(Fonagy et al., 2016)との報告もなされている。しかし，RFQ は，高得点や低得点ではなく中位得点が省察機能の高さを表すと考えられているため，他の変数との相関による妥当性の検討が行いにくいという特徴がある。

また，先述したようにメンタライジングには，自己についてのメンタライジング，他者についてのメンタライジング，相互交流についてのメンタライジングなどの次元が区別されているが(Allen, Fonagy, & Bateman, 2008)，RFQ はこうした異なる次元を測定するものではない。しかも，項目数が 54 と多いうえに，厳密な日本語版を作成するにはバックトランスレーションなどの手続きを経て，原版と等価な同数の項目を作成する必要がある。項目の中には，“mystery”など,日本語に翻訳した際に原版の文意通りの日本語を探すのに苦労する言葉も含まれている。

日本においては，メンタライゼーションを測定する質問紙が山口(2016)によって作成されている。この尺度は,「対自的メンタライゼーション」と「対他的メンタライゼーション」という下位尺度から構成され，「メンタライゼーション質問紙(Mentalization Questionnaire: MQ)」と名付けられている。山口(2016)の研究では,作成した尺度の確証的因子分析が行われ，適合度の値が GFI=.839, AGFI=.806, RMSEA=.050 であったが，GFI および AGFI がやや低い値であり，モデルの適合における基準を十分に満たされているとはいいがたい。さらに，妥当性は一部の項目にしか確認されておらず，関連の程度も弱または中程度であることから，十分な妥当性が得られているとはいいがたい。また，山口の MQ には「自分の考えを言葉でうまく説明することができる」といった項目が含まれているが，上手く説明できるかどうかは言語能力などと関連しているので，メンタライジングを測定する項目としては適切でないと判断される。Fonagy の RFQ の 54 項目においても，言葉で説明することに関する項目は含まれておらず，自己報告式の質問紙調査に関していえば，うまく説明できるかどうかはさほど重視していないものと考えられる。その上，山口の尺度は，「すぐにわかる」といった擬似メンタライジングが混入しやすい内容になっているだけでなく，自己の心理と他者の心理状態の相互影響についての認識や，メンタライジングの認知的側面であるメタ認識を含むものではない。上地(2015)は，メンタライジングの重要な条件として，同じ事態に対する「多重的な複数の見方」(multiple perspectives)を考慮できることを挙げていることからも，山口の尺度はメンタライジングの概念を包括的に測定するものとは言いがたい。

「対自的メンタライゼーション」や「対他的メンタライゼーション」だけでなく，自己の心理状態と他者の心理状態の「相互影響」や「多重的な複数の見方」が考慮される必要があるといえる。したがって，尺度を使用するためには改善すべき点

があるといえる。

以上のように，現段階の日本においては，メンタライジング能力を測定する尺度で，信頼性や妥当性が十分証明されたものはまだないといえる。今後，日本においても，心理療法のためのアセスメントや，他のパーソナリティ変数との関連の検討のために，メンタライジング能力の尺度が必要になると考えられることから，適切な尺度を作成することは有意義であると考えられる。

本研究では，既存の尺度やメンタライジングと類似の概念の測定尺度を参考にして，メンタライジング能力を測定する簡便な質問紙尺度を作成することを目的とする。ここでは，FonagyのRFQの厳密な日本語版を作成するのではなく，より項目数が少なく，日本人が読んで自然に理解できる項目から成る質問紙を新たに作成する。

以上のことより，具体的にはまず，マインドフルネス，メタ認知，共感といったメンタライジングに類似する概念との相違に注意しながら，質問紙で測定できる側面を明確にし，既存の尺度も参考にしながら項目を収集する。その上で，メンタライジング能力尺度（Mentalizing Capacity Scale:以下，MCS）を作成し，その妥当性と信頼性を検討することを目的とする。

方法

予備調査

既存の尺度の項目を参考に，新たな項目をも作成し，これらにKJ法を実施した。その結果，「自己の心理状態の認識」，「他者の心理状態の認識」，「心理状態の表象性の理解」，「心理状態の相互影響」の4つのカテゴリーに分類される47項目を得た。

本調査

【研究対象】大学生590名を調査対象とし，質問紙への記入漏れなどを除いた527名（女性322名，男性205名）を分析対象とした。因子分析には527名全員のデータを用いた。妥当性検討のためには，この527名のうち328名に「共感経験尺度改訂版」と「視点別意識尺度」を実施し，残りの199名には「アダルト・アタッチメント・スタイル尺度」と「アレキシサイミア尺度TAS-20」を実施した。なお，本研究の一部（愛着およびアレキシサイミアとの関連）は，岡山大学教育学部4年生・宮川萌との共同研究である。

【調査時期】2017年11月上旬～12月中旬に行った。

【倫理的配慮】研究への参加は自由であり，個人が特定されることがないことなどを明記した。

【手続き】関東，中部，関西などにある計5つの大学に，質問冊子を郵送し，調査協力者によって調査が実施された。

【質問紙の内容】

(1)フェイスシートと教示

フェイスシート（性別，年齢，学年），教示は，「以下の文章の内容は，あなたにどのくらいあてはまりますか。最も近い答えの数字を○で囲んでください」，回答は，7：「とてもあてはまる」から1：「全くあてはまらない」までの7件法で求めた。妥当性検討のための尺度については，作成者の教示に従った。

(2)妥当性検討のための尺度

a.共感経験尺度改訂版(EESR，角田,1994)の計20項目

b.視点別意識尺度(津田,2010)の自己に対する内面意識7項目・他者に対する内面意識8項目の計15項目

c. アダルト・アタッチメント・スタイル尺度（ECR-RS）（古村・村上・戸田,2016)の回避6項目と不安3項目，計9項目

d. 日本語版 The 20-item Toronto Alexithymia Scale (TAS-20)(小牧・前田・有村・中田・篠田・緒方・志村・川村・久保)，計20項目

結果と考察

（1）因子分析および信頼性

因子分析の結果，5因子が抽出され，27項目が残った。第1因子は「他者の心理状態の確信的推測」（9項目；α=.84），第2因子は「自己の心理状態の内省」（5項目；α=.76），第3因子は「情動統制の不全」（4項目；α=.73），第4因子は「自己認識の困難」（4項目；α=.74），第5因子は「影響・変化の認識」（5 項目；α=.62）と名付けられた。第5因子に負荷する項目群を除いて，一応の内的整合性があることが確認された(Table 1)。

Table 1　MCS の因子分析結果

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
第1因子　他者心理状態の確信的推測(α=.84)					
18. 私は，相手の態度や行動を見れば，その人がどんな気持ちなのかがわかることが多い	**.78**	-.03	.02	.10	.02
6. 誰かが悩んだり落ち込んだりしているとき，私はその人の言葉や雰囲気からそれに気づくことが多い	**.69**	-.09	-.07	.07	.20
*30. 私は，相手のちょっとした言葉や仕草から相手の気持ちを推測するのが難しい	**-.67**	-.02	-.52	.10	.20
*26. 私は，相手の言葉や行動の裏に隠れている感情に気づかないことが多い	**-.62**	-.08	-.04	.11	.17
20. 私は，自分が何か不適切なことを言ってしまったとき，相手の反応からそれがわかるほうだ	**.62**	.12	.10	.08	-.03
*2. 私は，相手の表情や態度から相手の気持ちを読み取ることが苦手だ	**-.61**	.06	-.07	.14	-.01
42. 相手が私に対して怒っているときには，私は微妙な雰囲気からそれがわかるほうだ	**.51**	.19	.11	-.04	.02
4. 私は，自分の言葉や行動が相手の気持ちに影響を与えていることに気付くほうだ	**.51**	-.11	-.09	.07	.21
*40.相手が思っていることを相手の目や表情から推測するのは無理だと,私は思う	**-.44**	-.03	.06	.08	.01
第2因子　自己心理状態の内省(α=.76)					
45. 私は，自分の心の状態についてふりかえることがよくある	-.09	**.82**	.01	.01	.02
44. 私は，自分の中にわきおこる感情について思いをめぐらすことがよくある	-.03	**.79**	.07	.04	.00
*46. 私は，自分がどのように感じているかについてはあまり関心がない。	-.01	**-.52**	-.01	.11	.03
9. 私は，自分がした行動の裏にある気持ちについて考えることがよくある	.08	**.46**	-.18	.12	.19
21. 私は，自分が何か不適切なことを言ってしまったとき，相手の反応からそれがわかるほうだ	.20	**.41**	-.07	.03	.09
第3因子　情動統制の不全(α=.73)					
*36.私は，怒っていると,後から後悔するようなことを言ってしまう	.05	-.07	**.83**	-.05	.03
*33. 私は腹が立つと自分でも何を言っているのかわからないまましゃべってしまう	.12	-.07	**.67**	.15	-.06
*16. 私は，自分の気持ちが落ち着かないと他者を不快にさせる行動をすることがある	-.12	.05	**.49**	.01	.16
*47. 私は，思考や感情にふりまわされることが多い	-.01	.17	**.43**	.03	.18
第4因子　自己認識の困難（α=.74)					
*13. 私はどういう気持ちからそういう行動をしたのか，わからないことがよくある	-.01	-.06	-.08	**.76**	.14
25. 私は，どうしてそういう気持ちになったのか理由がわからないことがよくある	-.05	.13	.04	**.69**	-.07
*29. 私は，誰かと話していて，自分がなぜそう言ったのかよくわからないことがよくある	.00	-.11	.18	**.53**	.07
*1. 私は，自分がなぜそのような気持ちになっているのか，理由はすぐにわかる	.01	-.07	-.04	**-.52**	.30
第5因子　影響・変化の認識（α=.62)					
8. 私は，他者の言葉や行動によって自分の気持ちが動揺していることに気づくほうだ	.03	.09	.00	-.29	**.59**
12. 私は，自分の気持ちが相手の言葉や行動から影響を受けていることに気づくほうだ	.15	.06	-.10	.07	**.49**
5. 私の他者に対する見方は，自分の感情に影響されていることがわかる	-.08	.02	.21	-.11	**.47**
3. あるとき自分はこう思っていると確信していても，それは時間とともに変化することがあると思う	-.04	-.08	.12	.18	**.42**
17. 私は，自分の気持ちが変われば相手に対する見方も変わることに気づいている	-.02	.08	.05	.04	**.40**
因子寄与(累積寄与率41.23%)	4.18	2.90	2.65	3.14	2.34
因子間相関		因子2	因子3	因子4	因子5
*は逆転項目	因子1	.22	-.24	-.43	.13
	因子2		.16	.06	.47
	因子3			.50	.16
	因子4				.16

（2）共感経験との関連

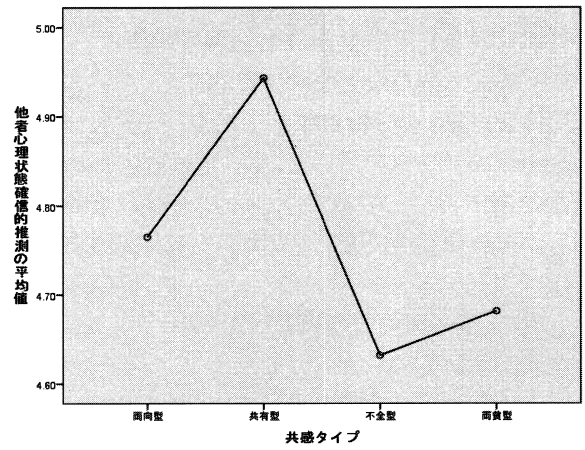
MCS の「他者の心理状態の確信的推測」を除く 4 下位尺度において，「両向型」が他の下位尺度よりも有意に高い得点を示した。両向型は，他者に共感できるときもあればそうでないときもあることを隠さずに報告するタイプであるから，日頃から自己と他者の心理状態をありのままに認識しようとしていると考えられる。その結果，両向型においては，MCS「自己の心理状態の内省」や MCS「影響・変化の認識」が他の群よりも高くなったのであろう。

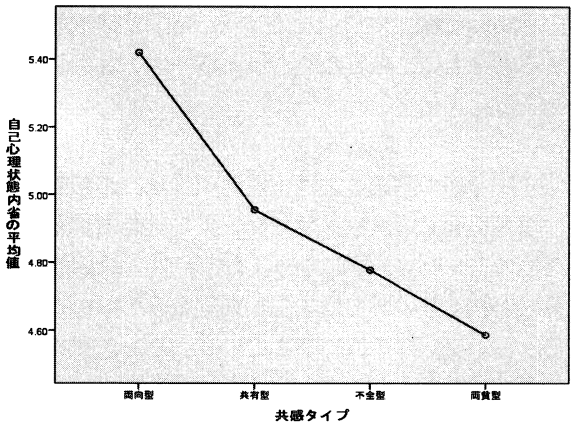
「他者の心理状態の確信的推測」において，有意ではないが共有型が他の群より高いのは，共有型の特徴である，共感できていると思い込む傾向が影響していると考えられる。

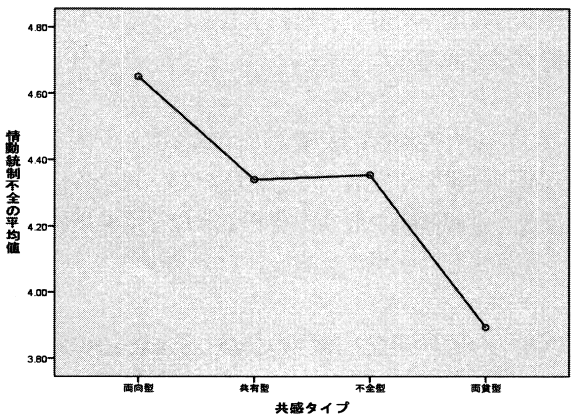
しかし，両向型において，MCS の「情動統制の不全」と「自己認識の困難」が他の群より高くなったことは，一見すると不可解に思える。しかし，これについても，両向型は自己のネガティヴな面をも見つめ，率直に報告するので，このような結果が見られた可能性も考えられる。

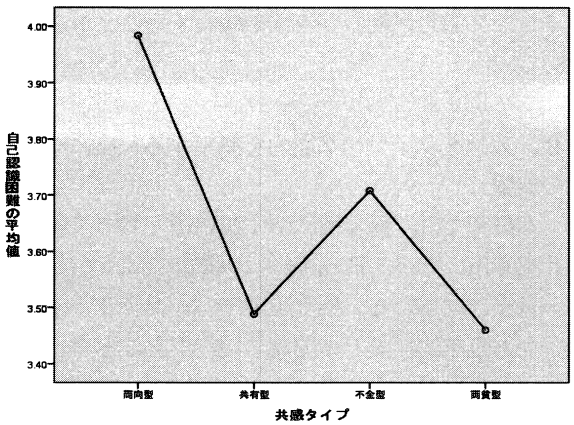
Table 2 共感タイプ別 MCS 得点

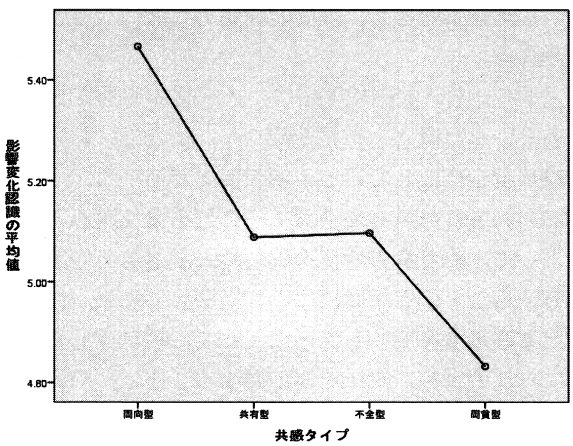
	共有経験尺度類型				F値
	両向型	共有型	不全型	両貧型	
	(N=78)	(N=86)	(N=89)	(N=75)	
他者心理状態の確信的推測	4.77	4.94	4.63	4.68	2.22 n.s.
	.88	.79	.94	.77	
自己心理状態の内省	5.42	4.96	4.78	4.59	9.85**
	.89	.95	1.17	.96	両向>共有,両向>不全,両向>両貧
情動統制の不全	4.65	4.34	4.35	3.89	4.95**
	1.20	1.19	1.41	1.03	両向>両貧
自己認識の困難	3.98	3.49	3.71	3.46	3.84*
	1.14	1.02	1.12	1.12	両向>共有,両向>両貧
影響・変化の認識	5.47	5.09	5.10	4.83	9.15**
	.69	.71	.77	.85	両向>共有,両向>不全,両向>両貧
上段:平均,下段:標準偏差		*p<.05	**p<.01		











（3）視点別意識尺度との関連

Table 3　MCS と視点別意識尺度との相関

	他者心理状態の確信的推測	自己心理状態の内省	情動統制の不全	自己認識の困難	影響・変化の認識
自己の内面への意識	.16**	.65**	.12*	.03	.34**
他者の内面への意識	.45**	.44**	-.01	-.06	.15**
N=328	*p<.05	**p<.01			

MCS「他者の心理状態の確信的推測」が「他者の内面への意識」と中程度の正の相関を示したことは，この下位尺度が他者の心理状態への注意と認識を測定していることの証左であると言える。MCS「自己の心理状態の内省」が「自己の内面への意識」と比較的高い相関を示したことは，この下位尺度が自己の心理状態に注意を向け，振り返る傾向を測定していることを示すものであると考えられる。

（4）愛着との関連

Table 4　MCS と愛着尺度との相関

	他者心理状態の確信的推測	自己心理状態の内省	情動統制の不全	自己認識の困難	影響・変化の認識
愛着回避	-.17*	-.04	-.10	.01	-.29**
愛着不安	-.09	.06	.15*	.17*	-.12
N=199	*p<.05	**p<.01			

「愛着回避」の高い人は他者との関係を浅いものにとどめがちであるから，「他者の心理状態の確信的推測」および「影響・変化の認識」と負の相関を示すことは妥当な結果である。また「愛着不安」の強い人たちは，見捨てられ不安が強く，他者に対してアンビヴァレントになりやすく，このような傾向が情動統制や自己認識を妨げるので，このような結果がみられたのであろう。

（5）アレキシサイミアとの関連

Table 5　MCS と TAS-20 との相関

	他者心理状態の確信的推測	自己心理状態の内省	情動統制の不全	自己認識の困難	影響・変化の認識
感情同定困難	-.10	.19**	.48**	.57**	.09
感情伝達困難	-.17*	.13	.20**	.49**	.05
外的志向	-.23**	-.42**	.04	.23**	-.29**
N=199	*p<.05	**p<.01			

MCS「情動統制の不全」は，とくに怒りなどのネガティヴな情動の調整がうまくいかない体験を表しているので，これが TAS-20「感情同定困難」と中程度の相関，TAS-20「感情伝達困難」と低い相関を示したことは，妥当な結果である。MCS「自己認識の困難」は，TAS-20 の「感情同定困難」および「感情伝達困難」と中程度の相関を示したが，この結果は「自己認識の困難」の妥当性を示すものと言えよう。

問題点と今後の課題

本研究では，メンタライジング能力を測定する尺度を開発し，その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。その結果，5 因子 27 項目が抽出され，一定の信頼性と妥当性が認められた。しかし，いくつかの問題点も残り，成熟した尺度にするためにはさらなる研究が必要であることが示唆された。

1．本尺度の問題点と今後の課題

（1）因子分析の結果得られた因子の内容が不統一である。例えば，他者の心理状態のメンタライジングと自己の心理状態のメンタライジングに分けて考えると，それぞれと関連する因子の間に対応関係がない。すでに述べたように，他者に関するメンタライジングは「他者の心理状態の確信的推測」にまとまり，自己に関するメンタライジングは 3 つに分割されてしまった。

（2）下位尺度のうち，「他者の心理状態の確信的推測」は，メンタライジング能力にとってポジティヴな意味を持つが，得点の高すぎは問題であることが窺える。「自己の心理状態の内省」と「影響・変化の認識」は，おおむねポジティヴな意味を持つと考えられる。しかし，「情動統制の不全」と「自己認識の困難」については，ポジティヴな意味とネガティヴな意味の両方を持っているように思われる。つまり，それ自体はネガティヴなものに思えるが，それに気づいていることはポジティヴなこととして解釈できる。これらの下位尺度をこのような性質のまま残しておくのか，もっぱらポジティヴまたはネガティヴな意味を持つように修正するのかということが，今後の課題の一つであろう。

（3）下位尺度のα係数が「他者の心理状態の確信的推測」を除いて.80 に達しておらず，「影響・変化の認識」は.60 台であることから，項目内容を再検討するとともに，項目数をもっと増やすことも必要であろう。

（4）今回の調査における質問項目は，おおむねその項目を通してメンタライジングの「能力」を知るためのワーディングになっており，回答選択肢は自分にどれくらいあてはまるかを答える形になっている。しかし，今後は，能力というよりも，回答者が日頃メンタライジングという心的活動をどのくらい行っているのかを知るための項目内容に変更し，回答は「頻度」で答える形にするということも検討に値するであろう。

（5）妥当性検討に愛着との関連を取り上げるとすれば，使用する愛着尺度を再検討し，単なる行動ではなく主観体験を取り出せるような尺度を用いることが好ましいと思われる。

（6）今回の調査では行わなかったが，心の健康を測定する尺度との相関を検討することによって，心の健康に寄与するかどうかという視点からメンタライジング能力尺度の妥当性を検討することが必要である。

2．メンタライジング能力を測定する尺度についての展望

本研究では，妥当性に関する指標として，愛着や共感を用いたが，Fonagy らの研究においてに関連が見出されている，摂食障害やパーソナリティ障害やなど臨床的症候との関連の検討が必要と考えられる。今後は Fonagy らの研究と同様に，臨床群を対象とした実証的研究が重ねられることで，スクリーニングを目的とした尺度の開発も可能になると考えられる。

次に，朴・杉村(2009)は，メタ認知や内省的注意力といった概念を省察と統一し，子育てにおける省察尺度を作成している。親の自由記述から，子育てにおいて自分自身や子育てのことを振り返ることによって，親自身の考えを確かめ，子どもとの関係を考えることの有用性について指摘しており，作成した省察尺度を用いることによって，親自身も客観的に自己の省察スタイルを把握することで，子育ての改善の促進を示唆している。日ごろ子育てに追われる母親にとって，自己を振り返る時間はきわめて少

ないと考えられる。母親が自分自身を見つめなおす機会を得るだけでなく，俯瞰的に自分自身を捉えるという姿勢は，母親の養育態度について考える上でも，きわめて重要であると考えられる。このように，子育て支援の一助として，メンタライジングが寄与する可能性が示唆される。愛着の個人差の測定は，愛着スタイルとして分類されるように，今後メンタライジングにおいても，朴・杉村(2009)の指摘のように，個人のリフレクティブ・スタイルを把握することが重要になるであろう。

また，対象に関しても，愛着の個人差の測定尺度が愛着対象(一般他者や親密な他者)ごとに作成されてきた経緯を考えると，メンタライジングにおいても，どのような対象へのメンタライジングかに焦点を合わせる必要があるかもしれない。というのも，メンタライジングの対象によって，メンタライジングの方略が変わる可能性があると考えられるからである。相互影響の認識をメンタライズする際，対人関係の影響の強さが相手によって異なる可能性があるためである。つまり，一般他者に向けられたメンタライジングと養育者や恋人といった親密な関係性におけるメンタライジングとでは差異が生じるかもしれない。

最後に，本研究では，簡便に個人差を測定するための質問紙作成を作成したが，より詳細にメンタライジング能力を査定するためには質的な面接法が必要不可欠である。メンタライジング能力の査定がAAIから発展し，ナラティブを重視していることを考慮すると，質的アセスメントも重要であると考えられる。メンタライジング能力を査定するためには，質問紙と面接の両方を併用し，包括的に把握する必要があるといえる。

要　約

本研究はメンタライジング能力を測定する尺度を開発し，その信頼性と妥当性を確認することが目的であった。その結果，5因子27項目が抽出され，概ね信頼性と妥当性が認められた。

結果より，第1因子は計9項目を「他者の心理状態の確信的推測」，第2因子は計5項目を「自己の心理状態の内省」，第3因子は計4項目を「情動統制の不全」，第4因子は計4項目を「自己認識の困難」，第5因子は計5項目を「影響・変化の認識」と名付けた。因子分析の結果，尺度項目作成の段階で仮定していた因子とほぼ同様の結果が得られた。

研究結果より，概ね満足できる信頼性と妥当性が得られたといえる。

しかし，作成した尺度のα係数は0.8を下回ったものもあり，他の尺度との関連からも，十分な信頼性と妥当性が確保されたとはいいがたい。信頼性と妥当性に関しては，今後尺度として使用可能なものにするためには，いくつか課題を残す結果となった。

信頼性に関しては，今後項目数を増やし，精査する必要があるといえる。妥当性に関しては他の尺度との関連を検討する必要があるといえる。

【引用文献】

Allen, J.G., Fonagy, P., & Bateman, A.W. (2008). *Mentalizing in clinical practice.* Washington, DC: American Psychiatric Publishing,Inc. (上地雄一郎・林創・大澤多美子・鈴木康之訳 (2014) メンタライジングの理論と臨床:精神分析・愛着理論・発達精神病理学の統合 北大路書房)

Fonagy, P., Luyten, P., Moultin-perkins, A., Lee, Y., Warren, F., Howard, S., Ghinai, R., Fearon, P., & Lowyck, B. (2016). Development and Validation of a Self-Report Measure of Mentalizing: The Reflective Functioning Questionnaire. *PLOS ONE*

Fonagy,P., Steel, M., Steel,H., & Target, M. (1998). Reflective-Functioning. Manual,version 5, for application to adult attachment interviews. *Unpublished Manuscript, University College London.*

角田豊 (1994)．共感経験尺度改訂版(EESR)の作成と共感性の類型化の試み　教育心理学研, **42**, 193-200.

上地雄一郎 (2015). メンタライジング・アプローチ入門：愛着理論を生かす心理療法　北大路書房

菊池裕義　(2013). 精神分析からメンタライゼーションへ　精神分析研究, **57**, 5-11.

菊池裕義・山田仁子・舘岡達矢・関 百合・東 啓悟・福田知子・奥野大地 (2012).　メンタライゼーションの測定：その信頼性と日本人大学生における境界例傾向との関連性　心理臨床学研究, **30**, 355-365.

小牧 元・前田基成・有村達之・中田光紀・篠田晴男・緒方一子・志村翠・川村則行・久保千春　(2003). 日本語版 The 20-item Toronto Alexithymia

Scale (TAS-20)の信頼性,因子的妥当性の検討, **43**(12), 839-846.

古村健太郎・村上達也・戸田弘二 (2016). アダルト・アタッチメント・スタイル尺度(ECR-RS)日本語版の妥当性評価 心理学研究,**87**(3), 303-313.

厚生労働省(2017). 「平成 28 年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数」〈http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000174478.pdf〉(検索 2017 年 8 月 20 日)

朴 信永・杉村 伸一郎 (2009). 幼児を育てている親の子育てに関する省察の 3 層モデルの検討発達心理学研,**20**(2), 99-111.

津田泰充 (2010). 視点別意識尺度作成のその信頼性・妥当性の検討 カウンセリング研究,**43**, 22-32.

山口正寛 (2016). メンタライゼーションと境界性パーソナリティ傾向との関連ーメンタライゼーション質問紙作成の試みからー 福山市立大学教育学部研究紀要,**4**,129-136.